

アフリカは暑いかな？



Is it hot in African Countries?

黒木浩則

KUROKI Hironori

日本技術開発株式会社
国際事業部/環境グループ

1. アフリカに対する日本人のイメージ

みなさんのアフリカに対するイメージは何だろうか。初渡航前のアフリカに対するイメージが既に風化しつつあるため、あらためて私の身近な10名程度にアンケートを採ってみた。

(1) アフリカの場所

ほとんどの人がアラビア半島をアフリカであると思こんでいるようで、正解者は30%を切っていた。

また、アフリカ大陸内で国名と場所が一致していた国は、エジプトや南アフリカ程度であり、まだまだアフリカは日本人にとって「遠くて遠い国々」と言える。

(2) アフリカは暑いかな？

アフリカのキーワードとして過半数以上の人が「暑い」「野生動物」「部族」「貧困・飢餓・難民」を挙げた。

たしかに海沿いの街、たとえばタンザニアのダルエスサラームなどは日較差が小さく、高い湿度のため暑いと感じる。例えて言うなら九州の夏に近い。ただし、ケニアのナイロビ、マラウイのリロングウェ、エチオピアのアディスアベバといった首都は、標高1,000m以上の高地にあることから、非常に過ごしやすい。

日最高気温は30度近くになるものの、湿度は低く、朝

夕は20度以下になり、木陰にいれば半袖では寒いくらいである。例えるなら軽井沢の夏といったところである。実際に、マラウイ南部のゾンバ、タンザニアのンゴロンゴロといった場所は、標高が2,000mを超えており、ホテルでは通年暖炉が焚かれている。

また、東アフリカでの季節は、日本のように春夏秋冬という表現ではなく、雨が降るか降らないかで分けられることが多い。大まかに言えば雨季と乾季、細かく言えば大雨季、大乾季、少雨季、小乾季という4季にわけられる。暑さ寒さという観点から言えば、1日のうちに四季があるといっても過言ではない。

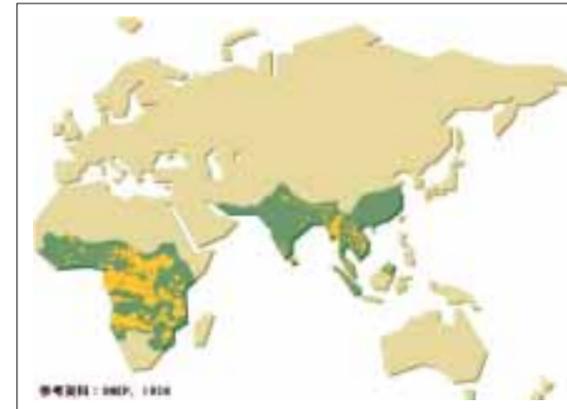
このような季節と気候であるため、雨季にアフリカに行けば、どこもかしこも草が生い茂るグリーンの大地であることから、飢餓や貧困とは縁遠いイメージが残る。逆に乾季に行けば、赤茶けた大地のイメージがどうしても残ってしまう。

(3) 野生動物はどこにでもいるか？

野生動物を見るために多くの観光客が、航空チケットの値段が安く宿泊施設の充実したケニアを選び「サファリ」を楽しんでいる。

東アフリカの中では、特にケニアとタンザニアの国立公園の質は非常に高く、両国の国立公園も野生動物を見ることができる。逆にそれ以外の国ではあまり期待しない方が賢明かもしれない。アフリカゾウ、ライオン、ヒョウ、バッファロー、サイ、いわゆるビッグファイブなどどこでも目で見られると思っている人も多いが、これらがまとめて見られる地域は非常に限られている。そのほとんどは関係者の努力で生息環境が維持されている国立公園や保護区域である。

これらの地域に入るためには1日15～25ドルの入場



■図2—アフリカゾウ生息区域(出典UNEP)(緑100年前、黄現在)



■写真1—自然保護区のやさしいゾウさん(タンザニア)

料に加え、レンタカーが1日100ドル以上、宿泊費も最低は100ドル程度、1泊2日のいわゆるサファリには、一人当たり最低200～300ドルかかる。このため首都に住んでいる現地人の多くは、野生動物など見たことがないというのが現実である。

現地にはじめて訪れる同僚を連れて何回か野生動物を見にいったが、彼らは一様に、「もっと感動するかと思った」と漏らした。これは、例えばアフリカゾウは世界でも限られた地域にしか生息していないものの、小さい頃からテレビ・本等のメディアや動物園で慣れ親しんだ、ある意味身近な動物になっており、それを日本のサファリパークに近い国立公園で再現したに過ぎないからであろう。しかし国立公園の「やさしいゾウさん」とは異なり、所定の金額さえ払えば狩猟のできるゲームリザーブの野生動物はおそろしい。国立公園内の「安全な人間」に慣れきっているアフリカゾウとは違い、ゲームリザーブ内の人間はゾウ側からみれば敵以外の何者でもない。

風下からそっとゾウのグループに近づいて行くと、グループ内の監視役である若いオスが警告を発してくる。まずは体を大きく見せるため、正面をこちらに向け耳をパタパタと動かす。さらに近づくと、体をゆすりながら足を踏みならし、奇声を発しながら突進するマネをしてくる。それでもこちらが立ち去らなると、突進をはじめ。一度、世界最大のゲームリザーブであるタンザニアのセルーで、このような恐怖の体験をした。いつも落ち着き払ったサファリ・ドライバーも、このときばかりは砂塵を上げてのカタパルト発進で難を逃れた。

アフリカゾウは貴重種として指定されており完全に保護されていると思っていたが、タンザニアのセルーゲームリザーブなどでは、過保護のために個体数が増えすぎ

ており、1匹あたり4,000ドル程度支払えば許可証が発行され、正式に狩猟もできる。こうしたお金が保護区の維持・管理費用に充てられている。

(4) マサイ族の現実

アフリカに行ったことのない友人に「来月からアフリカに行ってくるよ」と言うと、日本人、欧米人に限らず、ヤリを持った格好をマネて「ヤリを持った部族に気を付けろ!」と言う。日本人は全員がチョンマゲを結って刀を持っていると思込んでいるのとあまり変わらず、思わず苦笑いしてしまう。もちろん、今でも昔ながらの生活をしている部族はいる。

東アフリカで最も有名なのはマサイ族であろう。彼らはケニアとタンザニアの国境で牧畜を主な生業とし、家畜(牛と山羊)の餌を求めて移動する生活をしている。しかし、近年では家畜をマーケットで販売することで現金収入を得ているようである。さらに、欧米諸国の情報や物資が入ってくるようになり、これまでの生活を捨てて首都圏に出てくる若者や、移動せずに定住化し農業をやっている者もいる。最近では自転車に乗りながら携帯電話で連絡をとりあっている者もあり、あまりのイメージのギャップに驚かされる。

某観光地の周辺には商業的なマサイの村が建設され、その集落の裏側にはメンテナンス用の重機すら配備されている。一人20ドルの入場料を払い村に入ると、マサイダンスを見て、牛の糞でできた家屋の中に入ることができる。撮影の許可を求めると、流暢な英語を使う仲介役のマサイ族の男は「別料金で撮影できる」と言ってニヤリと笑った。

昔はライオンを狩ることがマサイ族の「大人」になるための儀式だったようだが、話をした若者はライオンを見



■図1—アフリカ地域



■写真2—マサイの少年と(タンザニア)



■写真3—ウガリ山羊煮込み定食(タンザニア)



■写真4—インジェラとおかず(エチオピア)



■写真5—山の珍味、ノネズミ(マラウイ)



■写真6—沿道の不発弾と地雷原(スーダン)

たことがないと言っていた。しかし唯一、彼らが今も守り通しているのは、シンボルである特有の赤い布を着用していることである。割礼前の男性は青か黒の布を着用するが、割礼後に晴れて赤い布の着用が認められるらしい。ちなみに、それらの布の下は何も身につけておらず、強い風が吹くと“ポロリ”の続出である。

2. アフリカでの生活環境

(1) 生活に必要な物

アンケート対象者に「アフリカで生活するのなら何を持って行くか」との質問をすると、お金を除き「薬」との回答が一番多かったが、次に多かったのは「食料品(日本食、特にお米)」であった。中には男性には全く思いもつかない「化粧品」(20代女性)というもあり、深くうなずいてしまった。

「薬」に関連して、アフリカでの病気と言え、やはりマラリアであろう。これはハマダラカを媒介する感染症であり、熱帯熱マラリア・三日熱マラリア・四日熱マラリア・卵形マラリアの4種類が確認されている。このうち熱帯熱マラリアのみ死亡例があるようだが、それ以外はよっぽど治療が遅れたり、合併症をおこさない限り死ぬようなことは少ないというのが定説である。

媒介するハマダラカの活動時間は夕方から早朝までであり、こまめに香取線香を焚き虫除けスプレーを使用していれば、わりと普通に避けることが可能である。マラリアに罹患された人の多くは、酔っぱらって夜半に蚊のいるところに長居するとか、半袖でいるとか、しっかり

睡眠をとらないとか、思い当たるフシがあるようである。なお、現地の人でも当然マラリアに罹患するが、ずる休みしたいときも同じ理由で休むため注意が必要である。

(2) 東アフリカのローカルフード

例えば1ヶ月の調査期間であれば、半分をその国の首都、半分を現地で過ごすパターンが多い。首都であれば、たいてい中華料理、韓国料理、イタリア料理があり、運がよければ値は張るが日本食にもありつける。しかしながら、地方道路整備のようなプロジェクトでは、水シャワーとローカルフードしかないような安宿に泊まらざるを得ないこともしばしばである。そんな安宿は、部屋の中は蚊だらけ、夜中にはネズミが室内を走り回り、ノミやダニの攻撃に会う確率が高い。

アフリカのローカルフードといえば、主食としてウガリが挙げられる。これはトウモロコシを粉粒にして、それをお湯で溶いて作った蒸しパンのような無味無臭のものである。おかずはチキンの素揚げ、牛か山羊のトマト煮込み、魚の素揚げである。これに、ハウレンソウのような野菜の油炒めと甘くないバナナの煮込み、豆の煮込みといった副菜が付いてフルコースである。このほかに特徴的な主食として挙げられるのは、エチオピアのインジェラであろう。原料はテフという穀物であり、それを粉にして練り、発酵させた後にパンケーキのように焼いたスポンジ状の“物体”である。見かけはやさしいが、実際

は酸味がつよい凶暴な味をしている。

また、多くの人はアフリカでは米が食べられないと思っているようだが、少なくとも東アフリカでは、日本の農業分野の技術協力により稲作が広範囲で行われ、インデカ種はもとよりジャポニカ種も入手が可能である。現地人も米のうまみを覚え、主食の好みウガリから米にかわりつつある人も多い。

ちなみにゲテモノ系の食べ物で最も印象に残ったのは、マラウイで見かけたボイルド・ノネズミの串刺しであった。これは捕まえたノネズミを濃い塩水で茹で、串刺しにして半生乾燥させただけの山の珍味である。カウンターパートの道路公社の職員は、ウマイといいながら頭からガブリと食いちぎった。これだけはどうしても食することができなかった。

(3) いわゆる3K

南スーダンは2005年に内戦が終わったばかりであり、日本人や欧米人が宿泊する施設がないため、急遽しつらえたキャンプサイトに泊まらざるを得なかった。スコールのような降雨とともに浸水するテントで枕を濡らし、蚊柱のできる共同のトイレで用を足し、ナイル川の泥水を引いた野外共同の水シャワーで頭と体を清める毎日は、あまりにもリアルなキャンプ生活であった。それ以降、家族から「キャンプに行きたい」とせがまれても、楽しいキャンプが想像できなくなってしまった。

ここでは、調査地域の沿道に無数の不発弾と地雷が埋まり、郊外では近隣国のゲリラが出没し山賊まがいのことを行っているようだった。

1ヶ月の滞在期間で、10人のメンバーのうち5名がマラリアと赤痢に罹患した。「汚い・危険・キツイ」のいわゆる3Kは、アフリカ圏をうろつく海外コンサルタントにとって日常茶飯事と言っていいだろう。

3. 海外におけるコンサルタントの社会的地位

一般的に、海外におけるコンサルタントの社会的地位は非常に高い。特にアフリカ諸国では、欧州諸国による植民地政策が知識と経験に裏打ちされた能力の高いコンサルタントによって進められてきた歴史を持つためである。また、途上国においてはインフラ整備のような公共性の高い仕事に関わることは、魅力ある仕事と認識されている。

日本ではコンサルタントも工事請負業者もあわせて「業者」と呼称し、同一視する事業者が多いが、アフリカでは技術的・中立的な見地で業務を行うコンサルタント

は、一線を画する立場にある。援助プロジェクトの対応を行う途上国の担当者は、この機会に日本のコンサルタントから新しい技術を得ようと、我々を質問攻めにする。

この中には手に職をつけて将来独り立ちしたいと思っている者も少なくない。このため、コンサルタントから技術を盗む事に関しては非常に貪欲である人が多い。このように発注者から尊敬の念をもって迎えられ、コンサルタントらしい責任ある仕事を果たすことのできる機会を得られるのは、まさにコンサルタント冥利に尽きるといえるだろう。

4. 憎めないアフリカ人

東～南アフリカでの仕事は、前述の通り3Kが前提であるが楽しい。それは、見渡す限りのサバンナの風景や野生動物との遭遇といった未知の状況に身を置けることもその理由であるが、とりわけ陽気で、なにかしら憎めない現地の人とのふれあいがあるからであろう。最初は外国人である我々に気を遣って礼儀正しいが、慣れてくれば平気で約束は破るし、待ち合わせには必ずといっていいほど遅れて来る。しかし、それほど悪意があるわけではない。

ケニア・タンザニアの現地語であるスワヒリ語では、明日も「KESHO」、期間を限定しない未来も「KESHO」であり、それは彼らの文化なのである。もともとそんな悠長なことは言えないので、適当になだめすかしながら、こちらのペースで共同の作業を進めていく。ひと仕事終わり、グラスを傾ければ、気持ちはそこそこうち解け、冗談を言えば、パチンと手をたたき合うほどに馴れ馴れしくなる。そこまでの関係になれば、家族を紹介され、貧しくても精一杯のもてなしをして楽しませてくれる。そこには、ただただ純粋な笑顔があるだけである。



■写真7—タンザニア人の家族と